

書評と紹介

てさらに論すべき課題の一つは、非西欧的な文化の伝統を持つ日本人が、その固有の歴史的宗教的伝統と対話しつつ、西欧哲学に根強く残存する実体主義的自然観には還元されぬ独自の自然神学を構想することであろう。

松田真理子著

『統合失調症者のヌミノース体験』

——臨床心理学的アプローチ——

創元社 二〇〇六年九月二〇日刊

A5判 XⅢ: 十二九頁 二五〇〇円＋税

森岡正芳

ヌミノースとは、宗教体験の根本に関わる宗教感情である。心理学研究の立場から、ヌミノースが内包する中核感情をしつかり把握する必要がある。しかしながら、個人を超えた集合無意識を仮定する臨床心理学の一部を除いて、心理学ではほとんど主題化され得なかった。今回、松田の優れたモノグラフを拝見する機会を与えられ、オットーの『聖なるもの』をあらためて読み直すきっかけになり、よい機会を得た。^(注)

オットー『聖なるもの』は、きわめて独創的な感情心理学の古典としても読める。ヌミノースは深い純粹感情であり、感情によるアприオリな認識として宗教体験の源泉である。オットーはそれを「魂の底」と表現している。ヌミノース感情の源泉となる事象は幅広い。オットーも「宗教以前」の呪術的なもの、アニミズム、靈魂崇拜、自然の畏怖すべき力、お伽噺などさまざまな領域からヌミノース感情の源泉をさぐる類似物を例示している。

オットーによればヌミノース感情の対象は明示できない。か

ろうじて表意記号 (ideogram) をつづり合わせて、暗示することはできるだけであるという。ヌミノースを感じる対象は「まったく他のもの」として一切の言表可能性をはばむものである。心理学の狭い意味での実証的アプローチでは限界が予想される。

ヌミノースという概念は魅力のあるものであるが、多義的で難解である。まして心理学研究からはこの難題にアプローチする方法が見つからなかった。それはこの概念の以上のような多義性に関わつての困難さも背景にあらう。ここで果敢にもヌミノースの概念を基軸に、臨床心理学のこれまた大きな難問である統合失調症の理解に立ち向かうという大胆な研究が出現した。これが本書である。松田の研究書はこの難解な概念に臨床心理学の立場から実証的に、説明をはかったという意味で特記すべきものである。

統合失調症の前兆ともいわれる特異体験、そして症状の中核と見なされる幻覚妄想体験はヌミノース体験と類似しているように見える。どの点が違うのか。そもそも、統合失調症においてヌミノース体験と、そうでない症状体験の区別はどのようにつけるのだろうか。研究上すぐさま予想される困難に対してたじろぐことなく、著者は一つの研究書をまとめ上げた。

著者はまず第1章において、宗教体験の根源にあるオットーのヌミノース体験を次のように規定する。①宗教体験における感情の普遍的な存在、②概念把握が不可能で述べがたいもの、③畏怖と魅惑を伴い、特別な身体の影響を引き起こす超自然的で二律背反的で特殊な感情、④絶対他者の存在を指標とし、そ

れらは人間にアприオリに組み込まれ、人間に所与されている予覚能力によって直観するもの(七頁)。

著者はユングの考えはオットーのヌミノース概念の新たな展開ととらえうる部分があることに注目する。ヌミノースとは元型が布置された状況で、無意識の自我への侵入とみることができる。ヌミノース、聖性を受動的に被る状態から、能動態へと変容することはユングの治療観につながるものである。

それではなぜ統合失調症の研究にヌミノース体験が問題になるのだろうか。第1章にて著者は、「ヌミノース体験を経て人生をより豊かに生きることができる人がいる一方で、その体験に呑み込まれ宗教妄想の中にとらわれてしまう精神病患者もいる」(二〇頁)と問題を投げかける。その分岐点はどこにあるのだろうか。著者は統合失調症の精神病理に関わる従来の知見を展望するなかで、「超越的他者」との関係と幻覚体験の質に注目する。宗教体験と統合失調症の幻覚体験はともに「超越的他者」との出会いにおいて一見似ているが、自己にとつての意味、体験の質、その後の人生に及ぼす影響の点で、両者の方向は正反対である。しかし幻覚体験については両者の識別は困難であり、健常者の宗教体験と精神病患者の幻覚妄想体験はメビウスの環の上に位置していると著者は述べる。

この点を明確にしていことが本書の目的であるが、第1章の問題部分は研究史の並列的記載が中心で、宗教体験研究という視点からみるともの足りない。問題部分をさらに構造化し、記述を深めてほしいところである。

さて著者はこの研究調査でヌミノース体験をどのように問い

書評と紹介

かけ、聞き取ったのだろうか。そして調査ではヌミノース主題はどのように扱われたのだろうか。

まず第2章にて、西洋人と日本人の健常者各一名にヌミノース体験の調査を行っている。二つのグループともに、特別な強い光を感じるといった視覚的体験を持っているのが特徴であるが、日本人グループの場合、聴覚的体験を持つものがいた反面、西洋人グループにはいなかった。

注目すべきは体験の年齢である。ヌミノース体験があった年齢は幅があるが、西洋人グループでは一〇歳以下が一名の内六名いて、日本人グループとは際だった差を示している。西洋人のヌミノース体験は幼少期が重要な位置を占めている点について、著者は自我形成の違いという文化的背景から検討している。西洋人の場合、幼少時に体験したヌミノース体験をあいまいなままに放置せず、自分の中に言語化し定位させる傾向があるために、幼少時の体験を振り返り言語的に記述することが可能であったのではないかということ、そして幼少期はヌミノース体験に対する親和性が高いこと、不思議な体験を素直に受容できる能力が高いこと、さらに幼少期の直観像素質との関連要因があげられる。

日本人グループのヌミノース体験の、その後の人生に対する影響についての記述が興味深い。報告者はその体験を後の自分の人生に肯定的に活かし、超越的な何ものかに対して自分のあり方が開けていく例が見られる。事例にみられる体験の記述をみるかぎり、ヌミノース体験に限定するには広範囲にわたるものと思われる。体験内容は錯綜し、広い意味での宗教体験の記

述とみてよいだろう。このような報告をさらに詳しく検討することの意義は大きい。歴史に残るような宗教者の回想記録ではなく、通常の生活者の報告であり、ふつうは記録に残らない体験の記述という意味でも貴重である。

第3章では「統合失調症者と健常者のヌミノース体験」の比較検討がなされる。統合失調症者たちの体験記述は、おおむね特定の信仰体験の文脈で語られ、その素材が用いられている。これはどのように考えられるだろうか。ヌミノース体験と信仰上の宗教体験の関連は基本的に押さえておくべき主題であろう。分析の方向としてさしあたり、二つの立場が考えられるだろう。宗教儀礼や場所に固有の特性および構造から解釈していく立場と、体験を個人のライフヒストリー（生活史）から分析解釈していく立場である。著者の立場は両方を折衷しているようにうかがわれるが明確ではない。

著者は統合失調症者二〇名に半構造化面接を実施し、また健常者一一〇名にはアンケートによる記述調査を行っている。健常者の内ヌミノース体験があると答えた群は九〇名と多く、ないと答えた群が二〇名である。あると答えた健常者群にはさらに、ヌミノース体験項目分類表によってその体験を精査するという方法を著者はとっている。健常者のヌミノース体験内容はきわめて多様である。このような調査からまず浮かび上がるのは、特定の信仰を持つものにヌミノース体験を持つものが多いという結果である。ヌミノースの概念を扱うのに避けて通れないのは、神あるいは超越的他者の観念との関連である。この点についても、あくまで心理学研究として禁欲的に著者は研究を

進める。著者は、体験の記述にあがってきた各宗教宗派の来歴を把握し、その違いから、体験の質の違いを分類検討することを試みている。確かに各宗教に固有の素材を核にしてヌミノス体験が構成されていることが記述から読み取れるが、その比較検討は慎重に行いたい。

視覚型の体験と聴覚型の体験の優劣によって、体験記述を分析することはこの研究の大きな柱であり、この視点はヌミノス体験と統合失調症の幻覚体験の違いを区分する目安として興味深い。統合失調症者の幻覚体験内容は聴覚型が多いのであるが、本研究の結果からヌミノス体験を持つものには、視覚的体験の出現が高いという可能性が示されている。

著者はバウムテストと星と波テストを以上の被験者に施行している。知的構成力がヌミノス群に高いという結果に注目したい。心的構成の中心に体験を統一するイメージがあり、宗教はその中心イメージを与えるのではないか。たとえばマリア像が個人の心的世界のなかに「強い中心的なイメージ」として位置し、そのイメージをもとに体験が構成されるということはありうるだろう。中心的イメージはしかし知的に構成されるものではなく、「体験のエピファニーを受け取る力」(一二〇頁)が先にあることはいうまでもない。この議論は宗教体験の根本に関わる問題であり、また「症状」とよばれるものが本人を守るイメージともなるといふ臨床的問題とも深くつながるものである。

第3章ではまた、統合失調症者のヌミノス体験についての事例研究が行われている。一つ一つがきわめて個性的で内密の

体験で、豊かな記述内容である。これらの事例研究は体験の語りをどう読み解くかという心理学でもその重要さを増すナラティブ研究領域とも重なり合っている。著者は症状の補償という読みの可能性を提示する。これは臨牀的な読みである。とはいっても、ヌミノスを統合失調症者の病的体験への解釈の一つにとどまるならば、研究の視点として積極的意味は乏しい。ここでさらに、文化文脈における意味生成という視点から、ヌミノス体験をとらえていく通路を開きたい。

一方で信仰という観点からの読みがある。「病者に神が宿る」という視点から(一三六頁)、報告者の語りを通じて世界と自己との関係が根本で問題となっているのが読み取れる。体験語りはその根底から出てくる産出物であろう。

第4章「統合失調者のヌミノス体験と幻覚妄想」では、ヌミノス体験のある統合失調症者の体験と、ヌミノス体験はないが幻覚妄想のある統合失調者の体験が比較検討される。ヌミノス体験を核とする宗教的幻覚なのか、統合失調の幻覚なのかの識別は困難な課題であるが、この研究ではその目安として、体験記述に表れた聴覚体験に注目する。幻覚妄想群は人の声を中心であるのに対し、ヌミノス群は神の声を聞いていること。そして体験に伴う体感に前者が違和感や否定的なものが多いのに対し、後者は肯定的であることなどが明らかにされている。幻覚妄想群の事例研究からも、人の声が刻み込まれる「直接知覚」が際だっていることがうかがわれる。またヌミノス体験は時間感覚の変容が少ない(一六〇頁)という結果はとても興味深い。

書評と紹介

バウムテストからみたヌミノース体験群の特徴は第4章においても、衝動統制力を持ち、心的な構成感が高いという特徴がうかがわれる。ヌミノース群の語る体験内容は鮮明で、信仰と深く関わり合う様子がわかる。聴覚体験、声の体験を大切にしている。

以上のような研究結果から、確かにヌミノース体験と呼ぶべき、幻覚妄想体験とは質の違う体験を持つ中核群が存在することが明らかになっていて、この研究の貴重な成果である。ただこの体験記述が宗教体験におけるヌミノースと一致するのかどうかについてはまだ慎重な議論を要すると思われる。宗教心理学の領域でも議論を喚起したいテーマである。

一方、幻覚妄想群とヌミノース群との違いが明確になってきたことから、相互の群の移行可能性について探ることは臨床的にも大いに探るべき課題であろう。本研究は幻覚幻聴、妄想などの「異常体験」をも宗教体験の側からとらえ直しうる基本軸を準備する。妄想という病的体験も、その人を保護する建設的な側面があるという統合失調症への心理療法的アプローチを基礎づけるものである。

本書は統合失調症の症状理解に益することの大きい研究であるが、統合失調症者、健常者を問わず、生活者のこのような広範囲にわたる宗教的体験に関わる調査自体がまだ少ない。聞き取り困難な主題であったろうが、事例記載は非常に豊かなものがあり、ヌミノースという個人の人生においても中核となる体験について語り続けた被験者の粘りと、体験語りを引き出した聞き手である著者の資質に敬服する。もちろんこのような中核

体験を人に伝え語ることの意味については十分に配慮し、再考を重ねていく必要がある。

注

Rudolf Otto, *Das Heilige: Über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen*, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1936. オッター (華園聡磨訳)『聖なるもの』創元社、二〇〇五年、一二六頁。